PROCEEDINGS 08 49-57
July 2009

韓国の親－息子関係における若者の自立の困難
―父・母・息子のインタビュー・データの家族戦略論的分析―

尹　　鈔　喜
（ジェンダー学際研究専攻）

1. 研究の目的と背景

本研究の目的は、韓国における若者の自立の困難を親－息子関係の視点から分析することにある。欧米では1980年代から、就職難、ライフスタイルの変化、晩婚化などによって、成人期への移行が順調に進まない若者のシティズンシップの獲得に注目した研究が行われてきたが［Jones & Wallace, 1992［=1996］］、日本では若者の自立は親子関係と結びつけられて論じられてきた。それは日本の親が、高度経済成長に豊かな経済力を獲得し、子どもに対して経済的支援を長期にわたり行うことが可能になり、若者の晩婚化が進行したのであると理解されたためである［宮本ほか、1997］。特に、就職しながらも親と同居をしている未婚成人女性を「パラサイト・シングル」［山田、1999］と呼び、親の過剰な愛情という近代家族的な規範と子どもの功利的選択性が若者の自立を阻害している要因であると指摘されたのである。

韓国の親もまた日本同様、自分の人生を犠牲にしてでも子どもへの支援を惜しまないといった特徴があり［Park & Lim、2003］、子どもに対する親の過剰な干渉や愛情は、若者の情緒的自立を妨げる要因であるとも指摘されている［Min et al.、1996］[1]。しかし韓国の親子関係では、伝統的な孝規範が強く働いているという特殊性も存在しており［本田、2004］、それゆえ、韓国の若者の自立の困難について考察する際には、近代家族的な規範と韓国特有の孝規範の双方が、どのような関係があるのかを明らかにする必要がある。

ところがこのような問題意識のもとに、韓国における若者の自立を親子関係という視点から分析しようとした研究は多くはない［尹、2007：2009］。それは韓国では1997年の外貨金融危機（IMF）による経済不況という構造的な要因が、若者の自立の研究にも影響を与えていたからだと考えられる。従来の研究では、若年層の失業率の急増によって、多くの若者が公務員などの安定的な職種を目指し、そのために勉強をする「就業準備者」を大量に生み出し［Cho、2005］、同時に、モラトリアムとしての大学院進学者の増加［福島、2006：2007］など、韓国の若者の自立は親子関係というよりはむしろ就職問題、教育問題として認識されていたのである[2]。

しかし、このような構造的な問題は、親子関係それ自体にも大きな影響を与えている。それゆえ親子の内部における若者の自立の困難を明らかにすることは、韓国の社会経済的な状況を家族の視点から捉え直すという重要な意義があるのだ。

2. 方法と対象

このような問題意識のもと、本研究は家族戦略（family strategy）論の視覚から、親子関係における若者の自立の困難の要因およびその構造を分析する。

宮本は、成人期への移行の途上にある若者の親子関係において、「親にとって数少ない子ども、高学歴の一般化、親の長寿化、急激な社会変動等々を背景に、親は子どものウェルビーイングを高めようとする意図的・無意図的戦略をも」ち、「他方、子どもの側も独り立ちできるまでの長い移行期を首尾よく通過するためには親を資源として活用できるかどうかが要件となっている」と指摘している［宮本、2004:p3］。すなわち若者の自立においても家族戦略論的な視点から注目する必要があるのだ。

田渕は、家族戦略論を「人々の合理性、あるいは能動性を前提としつつ、経済合理的な効用を最大化する基準には回収できないような、言説水準の行為と意味の操作にまで着目した行為理論」を家族現象に適用した理論枠組みであると述べている［田渕、1999a］。その際、研究の対象は、人々が家族に関わる諸現象に一定の秩序を与え、認識可能にするために用いる様々な言語的方略となり、特に家族規範の運用過程に注目が当てられる［田渕、1999b］。

こうした家族戦略論的な理論枠組みを利用して、韓国の若者の自立の困難を分析するために本研究では次のように

研究対象を設定した。

第１に、親－息子関係に注目する。すでに述べたように日本の研究では、親子関係内部での若者の自立の困難は、親－娘関係に注目した分析がなされているが［山田、1999：中西、2004］、韓国社会では男性（特に、長男）に自立を阻害するほどの強い孝規範が働いている可能性が考えられる。それゆえ本研究では、そうした孝規範が課せられやすい息子、中でも長男である息子を調査対象者として設定した。

第２に、本研究では自立の困難を経験している息子のみならず、その両親をも対象にしたインタビュー調査を実施し、分析している。これは、息子の自立の困難において両親からの働きかけが強く影響していると考えられ、中でも親側の家族規範（孝規範／近代家族規範）がどのように運用された結果、若者の自立の困難が生じるのかを明らかにすることで、同様の視点で親子関係に注目した従来の研究よりも［米村、2008］、分析的な知見を得ることが可能になると考えられるからである。

以下、分析の対象となるデータは、親と同居をしている30代前半の長男である未婚成人男性（以下、息子）３人とその父親、母親を対象に行ったインタビュー調査に基づいている[3]。インタビューは、対象者の許可のもとに録音し、すべて文字に起こしたうえで、日本語に訳した。必要に応じて補足（（括弧）で囲んだ）や、省略（（略）で示した）を行っている。

対象者のうち息子はすべて大学卒業以上の学歴であり、またそのうちの２人は現在もまだ学生である。年齢､学歴、職業、年収についての基本属性は表１の通りである。

3. 事例分析の結果

1）息子の希望より優先される親の希望

a. 大学専攻の選択について

息子とその父親、母親それぞれに今までの息子のライフイベントについて尋ねたところ、もっとも重要な出来事の１つとして大学入学が語られた。韓国では、子どもの教育に対する親の関心が非常に高く、子どもの大学入試はもっとも重要なイベントである。特に、偏差値による大学選択とともに専攻の選択は、将来の職業にもつながるため、息子だけではなく、親も息子の大学専攻を重要な課題として認識していたことが父母の語りから確認された。

大学入学当時の出来事について、父１（63歳）は専攻に対して息子１（32歳）と親の希望が異なったこと、そして親の意思を強く通した結果、親が希望した専攻に進学したことについて語っていた。父１は、職場で理系の研究者たちが働く姿を見て自分の息子は必ず理系を専攻させると決めた。息子１は法学部に入ることを望んだが、最終的には父１の意思に従って工学部に入ることになった。

> 父１：（大学の）専攻の選択は、本人（息子1）の意思よりも父親の私が選択した（側面が大きかった）。私が勤務する研究所が理系の研究所だったので、彼らが研究する姿を見て「自分の息子を理系に行かせるべきだ」と思った。（略）本人（息子1）は法学部に行きたがっていたけれど、高校１年が終わり、２年生になって（文系か理系かを）決めなければならなくなった時、私が（理系）に行かせました。

息子２のケースでも大学専攻の選択は本人の希望よりも親の希望が優先されている。息子２は、高校に入っても常に全校１位の優秀な学生であったため、目指している大学は韓国で最も偏差値の高いＡ大学と決まっていたが、専攻の選択については親子の間で意見が異なっていた。数学が好きだった息子２は､理系に進むことを希望していたが、母２から法学部に進学することを勧められたため、結局、息子はＡ大学の法学部に入ることになったのである。

> 母2:（高校）2年生の時に理系と文系を分けるでしょ

表１　対象者の基本属性

区分	名前	年齢	学歴	職業	年収*
家族１	父１	63歳	大学院（修士）	管理職（正社員）→ 退職	700～800万
	母１	58歳	短大	専業主婦	―
	息子１	32歳	大学院（博士）	働いたことはない	―
家族２	父２	62歳	高校	建築業（自営）→ 無職	900万以上
	母２	54歳	中学校	サービス業（パート）	100～200万
	息子２	32歳	大学院（修士）	アルバイト（大学の奨学金）	100万未満
家族３	父３	64歳	大学	管理職（役員）	200～300万
	母３	54歳	高校	不動産業（自営）→ 専業主婦	―
	息子３	30歳	大学	塾の講師（自営）	500～600万

* 年収は、対象者に韓国の貨幣単位であるウォンで記入してもらい、筆者が円に換算した。

う。本人（息子２）は、暗記するよりね、数学のように問題を解くことが好きで、それで息子は理系を選択したのよ。（略）だけど、（母２の）兄がよく知っていると思って、（略）「お兄さん、うちの子（息子２）が１年生の時は全校１位だったけど､2年生になって（文系か理系を決めなければならなくて）、理系を選んだのですが、どう思いますか？」と尋ねたら、「何で理系を選んだの？成績がいいなら文系を選んで法学部に行くべきだ」と。

息子１、息子２のケースでは、大学の専攻選択において子どもの希望を諦めさせ、親の希望が優先されていることが、親の側にも認識されていた。しかし、こうした事実自体を親が認識していない場合もある。親の強制より子どもの意思を重視すべきだという父３は、大学進学について息子３に専攻別に就くようになる職業と将来像を詳細に説明した後、最終的には息子３に選択させたと語っていた。

父３：私の場合は、子どもにこのように話しました。（略）「どの学科を出る（卒業する）とあなたの将来はどのようになる。周りの人はどんな人で、あなたがする仕事はどんな仕事で、あなたはどのような人生を生きる。」という話を、私が学科別に話してあげて、それで「あなたがこれからどんなことをしたいのか、どんな生活を過ごしたいのか」のような話をたくさんしました。私は。（略）それで（大学の）専攻は、私の話を聞いてから本人（息子３）が選択しました。

しかし、息子３の選択に任せるという父３の上の語りとは裏腹に、父親として息子に抱いている希望も存在した。父３は息子がエンジニアの専門職に就いて欲しいという気持ちを抱いていたため、文系よりも理系に進学することを勧めていたとも語っていた。

父３：できれば行政職よりはエンジニアの方がいいと。これからの韓国の展望が、今までは官僚（になりたい）意識が強くて､（官僚になることが）大事だと思って行政職になることを好んだけれど、これからは技術の時代だと。だから、それを考えてその方（理系）に進んだ方がいいと（息子３に）言って。

実際、息子３は父３の希望をきちんと認識していた。その結果、彼は「韓国文学科」に入りたいという本人の希望よりも、「理系に進んで専門職に就いて欲しい」という親の希望を優先し、理系に進学することになる。そして、父３は息子に情報を提供し、「息子３に自由に選択させた専攻」であるのだが、息子３にとっては「父親の希望を自分が選択した専攻」であると認識されているのである。

息子３：大学（の専攻）は、とにかく理系に行かなければならないと。それは、私が決めたわけではなく両親、父親が文系で働いていたので、ずっと資格とか（理系の）専門化された職業を（父親が）羨ましいと思っていましたので、私にも理系に進んで欲しいと（言いました）。それで、理系に進学したんです。

息子３は、理系に進んでほしいという親の要望によって理系を選択したが、文章を書くのが好きで、文章を書く時には幸せを感じることから、自分の適性が理系ではなく、文系であったことに気づいた。彼は、大学の専攻を韓国文学科に進んだ方が今より幸せだったかもしれないと語っていた。

息子３：（親は）私に理系に進んでほしいと。まぁ、そのときの雰囲気が男はみんな理系に行く雰囲気だったし、それで自然に理系に進みました。だけど、実は私は文系タイプです。当然だと思って（理系に）進みましたが、自分が理系のタイプではないということを後で気づいたのです。「あ、これは違う」と。（略）文章を書くのが好きで、文章を書く瞬間は自分の素直な気持ちが全部出せるし。それで、漠然と「韓国文学科に行きたい」と思いました。うん、そうすると、もっと幸せになるんじゃないか､と考えたことがあります。

以上､３家族の事例から息子の大学専攻の選択において、親子の希望に相違が生じた場合、息子の希望よりも親の希望が重視される選択が行われる傾向が確認された｡親側は、父１や母２のように息子の希望を認識しながら、親の希望に沿った選択を行うように息子に命令、説得を行っていることが確認できた。また、息子３の家族のように、親側は息子に対して自由に選択させるつもりでいても、親の望みが分かる息子は、親の希望に合わせた選択を行っていた。

b. 職業の選択について

大学の専攻と同様に、就業においても親の希望が息子の希望よりも優先されるケースが存在する。

大学を卒業してから将校として兵役を終えた息子１は、その後、大学院の修士課程と博士課程に進学し、８年間に渡って勉学を続けた。母１は息子３が修士課程を終えた後、就職をしたがっていたが、父親と大学の先生の反対で博士課程まで進学したのだと述べた。

母１：修士を卒業して、（息子１は）就職しようとしたけれど、教授が止めて、（略）父親（父１）も修士と学士は同じだと言って、最後まで博士までやらなければならないと言って、それで博士まですることになりました。

父１は息子１にすぐには就職をさせずに大学院の勉強を続けさせたことについて、職場の研究所を例に上げて、すぐ就職をするよりもきちんと勉強をしてから社会に出た方がより高い地位に就く早い道だと説明していた。

父１：私は研究所で勤務したので、うん、ちゃんと学ばなければならないと、ちゃんと順序を踏んで学んでから社会に出るのが（高い地位に上がる）早い道だと。というのを私が（研究所の）知識（が重視される）社会で見たので、それを（息子に）実現させたんだ。

母２は、息子２が法学の勉強に悩んでいることを分かっていたにもかかわらず、息子２が司法試験に受かって出世して欲しいという気持ちで、息子２の就業に反対し、勉強を止めさせなかったという。

母２：大学に入ってから専攻が自分（息子２）に合わないと悩みましたが（略）私は、もうあの専攻（法学部）に入ったから（そのまま続けるのが）いいと思って。親の気持ちはそうじゃないですか。それで、ずっと押しつけられていたんです、「（司法試験を）続けなさい」と。（略）母親の欲のせいで、息子が大変苦労をしました。「就職する」と言われて私が「駄目だ」と、「（軍隊に入って）将校になる」と言われても「とりあえず合格してから行きなさい」と。（略）それが間違いだったのです。自分がやりたいことをやらせるべきだったのに、あの心の優しい子にお母さんの考えを押しつけるから、子ども（息子２）が辛かったでしょう。

上記の２事例とも息子の就業希望が親の希望によって叶わなかったのである。さらに、そうした選択が時間を経て親に悔いを残させる場合もあることが明らかになった。

2）親の意思優越を正当化する論理構造

これまで、息子の大学や就職といった重要なライフイベントにおける親の影響力について確認した。次は、息子の意思決定に対する親の影響力について、親側はどのような認識を持っているのかを検討する。対象者の親は、大学、就職といった息子の重要なライフイベントにおいて親子の希望が異なる場合、息子が親の希望に従った選択を行うように強要、説得、相談などの行為を行ったと語っていた。親側は、子どもの希望よりも親の希望を重視するという行為の正当性について、韓国社会特有の孝規範を用いて説明していた。以下、親の言明において、親の意思優越を正当化する論理構造について、子どもの未来のために、親の犠牲、孝規範の３つに分けて説明する。

a. 子どもの未来のために

父１は、息子の様々なライフイベントにおいて息子に選択を任せるより親が選択してあげるべきだと言い、その理由について親は人生を先に生きてきた先輩であるため子どもに助言をしてあげる必要があるからだと説明した。父１は、若い頃は職場で高い地位に上がることを目指して努力してきたが、一人の力では限界を感じたという。そこで、今まで父１が社会生活で身につけた人生を生きるスキルをもとに、息子にアドバイスをすることによって、息子は間違った選択をせずにしっかり順序を踏んで生きることができると解釈していた。

父１：（子どもを）親が精神的に支えてあげなきゃならないと思うんだ。（人生を）生きるスキルは、経験してみなきゃそのスキルは分からないんだよ。私は長い間、社会生活をしたから、40年ぐらい組織生活をしたから…私は知っているんだ。だから、そのようなことを（子どもに）アドバイスしてあげなきゃならないんだ。そうやってこそ、（子どもは）ちゃんと成長できるんだ。（略）本人が判断するよりも第三者が判断してあげた方がもっと正確だけど、他人が判断する場合は嫉妬の気持ちが入るから。だから父親が判断してあげるとそう（嫉妬の感情）ではないから。

人生を先に経験した先輩として子どもに助言をすべきだと言う父１は、子どもへの助言は、親が亡くなるまで一生続くものとして認識している。

父１：…それ（子どもへのアドバイス）は私が死ぬまでしてあげなきゃ。（子どもは）経済的自立はできるかもしれないけれど、表面的な自立はできるかもしれないけど、ある突発的な状況が発生したとき、そこへの対処については、そのスキルについては、長い経験を持っている人でないと難しいんだよ。

対象者の親は、息子の将来について語る際、親自身の人生で叶わなかった夢を息子が代わりに実現してくれることを期待する気持ちを述べていた。母２は、母親自身が勉強をする機会がなかったため、息子にたくさん勉強をさせて

立派になってもらうことによって、自分自身の勉学の夢を息子に代わりに実現してほしかったと言う。

母２：この子（息子２）は本当に立派に育てたいと。私は勉強をすることができなかったけれど、長く勉強ができなかったけれど、我が子は、本当に、本当に立派に育てたいと、いつも心の中で考えていました。そこで、（息子２が）生まれて３歳の時から何か（習いこと）をさせて、子どもに一生懸命に気を配りました。

b. 親の犠牲

対象者の親は息子に対する親の影響力について説明する際、息子のための努力や、苦労といった息子のために払った犠牲というレトリックを用いて親の行為を正当化していた。母２は、自分の欲のせいで息子２が望んでいない司法試験を受けることを強要したことについて深く後悔し、息子２について罪悪感を持っていた。母２は、自分の間違いを弁解する際、母２自身はどんなに大変でも息子２の将来のためになることだけを考えていたことを語っていた。

母２：私は子どもに何かをもらうという気持ちより、自分のすべてを犠牲にしても、我が子がうまくいくならそれ以上に願うことはないと思っていたんです。子ども達がよければそれでいい、いつもそれだけでした。だから、どんなに疲れても、（息子３が）試験の時など、私が寝ることができなくなってもそれに対して嫌だと思ったことはなかったのです。どうしても、どうしても、私が頑張って（息子３を）良い状態にしてあげたい、その気持ちしかなかったのです。

また父３は一般の父親とは異なり、息子３と長い時間接していたことについて誇りを持っていた。彼は、いつも早く家に帰って常に息子３と一緒に遊んであげて、週末は常に家族が一緒に出かけていたと父親として大きな努力を払っていたことを語った。

父３：（息子３が）子どもの頃から、私が働いていた間は、朝９時に出勤して午後５時半に退社しました。そして、家に帰ると子ども達と 12 時にテレビが終わるまで一緒に遊んで寝ました。だから、想像してみてください。お父さんとそんなに長い時間を子どもの頃から一緒に過してきたらお父さんとの関係がどうなるのか。（略）子どもの頃からいっぱい会話をして一緒に遊んで。毎日、学校から帰ってきても、日曜日も、お父さんと家族が別々に遊んだことがないのです。家族と一緒に遊園地に行ったり、（略）宮のようなところに行ったり、別々に遊びに行ったことは私が知っている限りではないです。このような親の犠牲というレトリックは、子どもが親に申し訳ない気持ちを抱き、親を大事にすべきという気持ちから親の影響を受け入れる大きな要因として作用するのではないだろうか。

c. 孝規範

親が息子について述べる際、もっとも多く現れた表現は、「親の言うことよくきく良い子」、「親に心配させない良い子」であった。このような親の言葉の中では、親の言葉に逆らわないこと、親に辛い気持ちをさせないことが「親孝行」であるという認識が含まれていると思われる。このような孝規範は、子どもが選択を行う際、自分の意思よりも親の意見を重視する大きな要因であると考えられる。つまり、親子の認識の相違が生じた場合、親は子ども自身の希望を重視するより、親の気持ちを大事にすべきであると孝規範を伝えることによって、子どもは親の気持ちに逆らえずに自分が望んでいない選択を行うのではないだろうか。大学の専攻選択について悩んでいた息子３について母３は、親を心配させない、親の言うことを良くきいてくれる本当にいい子であった、と語っていた。

母３：（息子３は）今まで親を心配させることは一切ありませんでした。昔からやめなさいと言うことはやらないで、ずっと勉強して、学校から帰ってくると勉強だけして、「外に出かけて何時まで遊んで来なさい」というとちょうどその時間まで遊んできて。本当にいい子でした。（子育てで）大変なことは無かったです。親を心配させることは無かったです。うちの子（息子３）は。

また子どもの希望を認めてあげず、司法試験を受けることを勧め続けたあげく、失敗してしまった母２の語りでも、息子２は親の言うことをよくきいてくれる優しい子どもであったと表現されていた。

母２：うちの子（息子２）は本当に優しくて、優しくて…親の言うことを良くきいてくれるから…。

以上の事例から、子どもの未来を考えている親は、子どものために犠牲を払っており、こうした認識に伝統的な孝規範が結びつくことによって、子どもの希望を否定しても親の希望を優先させることが正当化されるのであった。

3）親の意思優越に対する息子の対抗戦略

一方、息子は様々なライフイベントにおける親の影響力

についてどのように認識しているだろうか。ここでは息子の言明から、その認識を検討する。

a. 良好な親子関係の持続

息子側は、様々なライフイベントの選択における親の影響力を受容する場合、それを孝規範に従った行為と見なす事例が多く見られた。息子の希望と親の希望が異なる場合、親子関係を円満に維持するために親の意思を優先して受け入れる行為は、親側が子どもへの影響力を正当化するために用いた孝規範が反映されたものであると考えられる。

息子２は、大学の専攻から自分が好きな選択ができなかったという悔しさより、親の期待に応えることができなかったという申し訳ない気持ちを強く持っていた。彼は、司法試験の失敗を親子関係の不和の原因として認識し、経済的に自立できないことで息子としての役割を果たせなかったと思っていた。

息子２：私が息子だから、経済的にも家族に「私がこんなに（立派に）なった」と見せてあげるようになったら、家族も安心するし。なんと言うか、親は息子に期待する気持があるので、（私が試験に）受かったら良かったけど、私がずっと試験に（落ちたので）（略）。勉強をきちんとしなかったので、家族関係があまり良くなかったです。

そして息子２は、自分の意見よりも親の希望を受け入れる方が親子関係を円満に維持する上で良いと考えていたのである。

息子２：私も（家事を）手伝ってあげたかったのですが、親はむしろ他のことに時間を、自分のために使った方が良いと思っているので。（親が）そう思っているから、親が気楽になった方がいいと思います。だから私は（家事を）やりません。むしろ親が嫌がるので、親が好きなことをした方がいいのです。

息子１は、学業を終えて就職が決まり、交際相手との結婚も決まっていて、社会的には自立の条件を満たしていたとも言える。しかし経済的にも生活面でも親から分離しているにも関わらず、親からの分離はできないと語っていた。その理由は、親子関係はずっと繋がっているものであり、親が亡くなるまで切ることはできないためであると言う。つまり就職、結婚といった社会的な親子の分離とは関係なく、親の言うことをきちんときくべきであるという孝規範を一生大事にしていきたいと言うのである。

息子１：（反抗や拒否について）そんなことはできません。してはいけないでしょう。ただ、（親が言うことを）きかなければならないでしょう。（親から）経済的に自立しても実際は分離できない。家族だから親から完全に分離することはできないと思います。親子関係は切れないから難しいのです。親が亡くなるまでは繋がっているから、どうしようもないのです。

b. 親からの支援の利用

息子側は円満な親子関係を維持するために親の影響力を受け入れる場合がある一方で、親からの支援を積極的に利用するために親の言葉に逆らわないという戦略をとる場合も見られた。息子にとっては、親が希望する選択を行うことによって親子の緊張関係を緩和するのみならず親からの支援を得やすい状況を生み出すことになる。息子１は、ライフイベントの様々な選択において親の意思を受け入れたことについて、「生き残るため」であると表現していた。今の家にいられないと何もできなくなるため、与えることは与えて、もらうことはもらうといった形で、要領よく振る舞うスキルを身につけることで、「表面上」親子関係をうまく維持して親からの支援を受けてきたと言うのである。

息子１：私が生きたいからです。生き残るために、この家で生き残らなきゃならないから。この家にいられないと私は何もすることができないから。言われる通りするしかないのです。仕方ありません。避ける方法、まぁ、たまには（親の言うことを）聞いてあげて、やりたくなかったら、適当に「やる」と言っといて、やらないとか。ああいうふうに避けていく、表面上うまくやっていくために…適当にやることはやって、与えることは与えて、もらうことはもらうように。適当に要領よくしなきゃ。全部聞いてあげることができないから、聞いてあげるフリをするというスキルがなければね。

息子３が、現在、親と一緒に暮らして満足している理由は、親から衣食住の支援を受けられることへの気楽さであった。父親の干渉に悩んでいた息子３は、親元を離れて暮らして親子分離を図るよりも、今の親子関係を維持することで、親から衣食住の支援を受けられ、楽に暮らすことができることを強調していた。

息子３：今は親の家で世話になっているので、衣食住をすべて母親、父親が与えてくれて、経済的に衣食住は親が支援してくれている。だから（家を）離れた

くもないけれど、出るところもないし…今に満足しています。母親が作ってくれるご飯が一番おいしいし、家が一番楽だし、この状態が一番楽でしょう。離家して一人で（暮らすと）何か（材料を）買って、自分で作って、自分で洗濯をして。このようなことはむしろ煩わしいと思う。今が一番楽な状態だと思います。結婚するとこのようにはできなくなるから。

4. 結論と考察

分析の結果、韓国の親－息子関係において、大学の専攻の選択や就職の選択の意思決定の場面で、息子の希望よりも親の希望が優先される実態が確認された。そして親側は、そうした親の意思優越について、親の行動が子どもの未来のためになり、親は子どものために多くの犠牲を払っているからというレトリックを用いることによって正当化していた。その際、論理を補強するために、韓国社会に存在している孝規範が積極的に用いられていた。このような親の意思優越を正当化する論理構造に対して、息子側は良好な親子関係を持続するために孝規範を受容する一方、親からの支援を利用するためといった功利的な認識を取ることで対抗的に現状を正当化していた。

このように親が子どもの行動を統制するために規範の論理を利用し、息子が親子関係の維持とその功利的な理解によって現状を正当化することは、親子相互の「戦略的」な行為［田渕、1999a：1999b］として理解できると同時に、そうした主体的かつ戦略的な親子の認識こそが、韓国社会における若者の自立の困難の要因であるとも言えるのだ。

しかし、このような親子相互の家族戦略による自立の困難状況もまた、韓国の社会経済的な状況に規定されたものである。親側は息子が高収入の社会的地位が高い職業に就くことを期待して、息子の希望を諦めさせてまで親の希望を優先させているが、韓国では1997年の外貨金融危機（IMF）以来、青年の就職難は社会的な問題になってしまっている。韓国における若者に対する雇用政策が機能しない状況の中で、経済的に困難な状況に陥る若者を支えるのは家族、つまり親であるという認識は変わっていないのだ。それゆえ親は息子が経済的に自立できるまでさまざまな支援を続けるのだが、このような子どもに対する親の支援の長期化は、成人になった息子に対する親の意思優越の長期化にも繋がるのである。つまり親に経済的な支援を受けなければならない状況にいる息子にとっては、親の支援を受けるために親の意思を優先する行為を取らざるを得ないのである。そうした状況を親－息子の双方が利用可能な家族規範によって説明しているのであり、その実態が本研究で明らかにされているのだ。

本研究は、わずか3事例の分析に過ぎず、知見の一般化には限界がある。それゆえ今後はより多くの事例の検討によって韓国社会の親－息子をめぐる自立の問題の特徴を導き出す必要があるだろう。また、今回の事例において孝規範が強く表れたのは対象者の3人がともに長男であったことが影響しているだろう。今後は、こうした孝規範の強さが娘、あるいは長男以外の息子においても強く働くのか、あるいは異なる論理や規範が存在するのか明らかにしていく必要があると考えられる。

（注）

1　実際に、韓国社会では学業を終えても親の経済力に依存する「カンガルー族」、一度親から独立した後、経済的困難にぶつかり親元に戻る「ブーメラン族」など、成人になっても親に経済的に依存する若者が増えていると指摘されている［주간동아、2000.11.03］。

2　近年の経済不況の中で、日本の研究でも若者の自立を社会経済的な側面から理解しようとする動向が見られる［乾、2002：武石、2002：田中、2002］。

3　対象者は、著者の知人から始まり次々に紹介をしてもらうスノーボール方式で集め、それぞれ対象者の自宅や職場、公園、喫茶店などで1～2時間程度のインタビューを行った。息子とその父親、母親が自宅にいた場合は、お互いのインタビュー内容が他の家族に聞こえないように、別室で1人ずつインタビューを行った。質問内容は、インタビューを行う前に質問紙を用意して基本的な属性についての回答をしてもらい、その後、息子のライフイベントの出来事について自由に語ってもらった。

（文献）

Cho, J. J.、2005、「청년실업문제를 어떻게 볼 것인가」『대구사회비평』、14（2）:15-28.

福島みのり、2006、「大学院進学とポスト青年期の関連性についての考察――高学歴世代の『実存の危機』をめぐって」、『現代韓国朝鮮研究』6:66-78.

福島みのり、2007、「韓国社会における高学歴化と生存戦略――大学院に進学する若者たち」、『現代の理論』13: 164-175.

本田洋、2004、「韓国の社会変動と家族――父子関係を支える社会経済的規範の変化とその影響を中心に」、『〔シリーズ比較家族第Ⅱ期2〕父親と家族―父性を問う［新装版］』、早稲田大学出版部、196-226.

乾　彰夫、2002、「変わる若者の生活環境とライフスタイル：『戦後型青年期』の解体・再編と若者の中の困難」、日本家政学会生活経営学部会編、『生活経営学研究』37: 3-7.

Jones, G., & Wallace, C.,1992, *Youth Family and Citizenship* Open University Press.（＝［1996］2002 宮本みち子監訳・鈴木宏訳『第2版 若者はなぜ大人になれないのか―家族・国家・シティズンシップ』新評論.）

『주간동아』2000. 11. 03.

Min, K. W., Chun, S. M. & Choi, J. H.,1996,「역기능적 가족구조와 대학생의 심리적 독립」、『대학상담연구』7(1):107-134.

宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘、1997、『未婚化社会の親子関係――お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣選書.

宮本みち子、2004、『ポスト青年期と親子戦略――大人になる意味と形の変容』勁草書房
中西泰子、2004、「友達母娘のなにがわるい？－『家族の中の若者』という視点」、宮台真司編、『21 世紀の現実――社会学の挑戦』ミネルヴァ書房、53-73.
Park, Y. S. & Lim, I. C.,2003,『한국인의 부모자녀관계－자기개념과 가족역할인식의 토착심리 탐구』교육과학사.
田渕六郎、1999a、「『家族戦略』研究の可能性――概念上の問題を中心に」、『人文学報』300:87-117.
田渕六郎、1999b、「家族戦略と現代家族の変容」、庄司興吉編、『共生社会の文化戦略』梓出版社、43-67.
武石恵美子、2002、「若年者を取り巻く雇用の現状」、日本家政学会生活経営学部会編、『生活経営学研究』37:15-20.
田中恒子、2002、「青年期の自立と居住状況」、日本家政学会生活経営学部会編、『生活経営学研究』37:21-26.
山田昌弘、1999、『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書.
尹鈔喜、2007、「成人未婚者の自立に影響を与える要因分析――韓国の場合」、家族社会学会編、『家族社会学研究』19(1): 7-17.
尹鈔喜、2009、「韓国における若者の『自立意識』と親子関係――韓国の親子関係と若者の自立への葛藤に注目して」、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科編、『人間文化創成科学論叢』11: 489-498.
米村千代、2008、「ポスト青年期の親子関係意識――『良好さ』と『自立』の関係」、『人文研究』37: 127-150.

Independence of Premarital Young Males in Korea: Analyses of Father-Mother-Son's Interview Data

Jin-Hee YOON
(Interdisciplinary Gender Studies)

Recently, independence of young adults has become a topic of discussion in Korea. Prior research shows that independence of Korean young adults is influenced by their parent-child relationships. It is reported that parent-child attachment is extremely strong in Korean society. The purpose of this study is to explore how the parental expectations are given priority over those of sons in decision-making process in Korea. I also examine the parents-son relationships that prevents the young sons from becoming independent. I conducted in-depth interviews with unmarried males who are living with their parents, and with their parents (both mothers and fathers) in August 2008. Qualitative analyses of the data indicate that in the decision-making such as choosing university majors and occupations, the expectations of the parents were given priority over those of the sons. This was frequently justified by parents using the rhetoric that the parents' decisions were made for the sake of their child's future, and that the parents sacrificed a lot for their child. On the other hand, the sons freuquently accepted parents' strategic plans in order to maintain a satisfactory parents-son relationships. This can, however, be interpreted that the sons' behaviors were also strategic because they tried to profit from the parental guidance These "strategic" behaviors by parents as well as sons are primary factors in making premarital males' independence from their parents difficult in Korea. I am going to clarify the characteristic of the premarital young female and the family in future.

Keywords: premarital young males, independence, parent-son relationships, strategies, Korean society